

Title	貧富問題(三、完)
Author(s)	田島, 錦治
Citation	経済論叢 (1915), 1(6): 684-703
Issue Date	1915
URL	https://doi.org/10.14989/126933
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

學大科法學大國帝都京

叢論濟經

號六第 卷一第

論 說

●米價ノ騰落ト其調節ニ就テ(二)

●穀物倉庫論

●貧富問題(三)(完)

雜 錄

●大藏省證券ニ就テ尾上學士ニ應フ

●南洋新占領地研究ノ二

●保險學說ノ發展(二)

雜 報

●經濟的進化ト人口法則(二)(完)

●最近ノ金融問題(二)

●廣告稅ト廣告官營

●戰爭ト英國ノ貿易

●社會政策學會第九回大會記事

●京都法學會大會記事

法學博士 戸田 海市

助教授 河田 嗣郎

法學博士 田島 錦治

法學博士 小川 郷太郎

助教授 山本 美越乃

法學士 小島 昌太郎

講 師 米田 庄太郎

講 師 谷村 一太郎

法學博士 神戶 正雄

助教授 河田 嗣郎

講 師 高田 保馬

講 師 高田 保馬

貧富問題 (三、完)

法學博士 田島錦治

第五節 現時我國ニ於ケル富ノ集中

前節「我國現時ノ貧富問題」ノ題下ニ於テ余ハ既ニ現時我國ニ於テ富ノ集中カ迅速ニ行ハレツツアルコトヲ指摘シ二三ノ統計ヲ擧ケテ之ヲ説明シタリ而シテ今ヤ更ニ進ンテ稍詳細ニ之ヲ論證セムト欲ス

先ツ試ニ我國各種ノ産業ヲ視ルニ資本ノ合同ハ漸ク行ハレテ産業ノ規模ハ益々大トナリツツアリ今個人的企業ハ統計ノ據ルヘキモノナキヲ以テ暫ク之ヲ措キ會社の企業ニ就テ之ヲ見ルニ明治三十八年末ニ於テ我全國ノ會社數ハ合名合資株式ノ三種ヲ合シテ八千九百九十四社ニシテ其拂込資本ノ總額ハ大約九億七千五百八十四萬圓ナリシヲ以テ一社平均ノ資本ハ十一萬圓ニ滿タサリシカ七年後ノ大正元年末ニ於テハ會社數一萬三千八百七十九社拂込資本總額大約十七億五千六百六十一萬圓トナリ即チ一社平均十三萬圓弱トナリタリ而シテ若シ會社ヲ資本等級別トスルトキハ一層明カニ資本集中規模増大ノ事實ヲ發見スヘシ即チ左表ノ如シ(第三十三統計年鑑ニ據ル)

資 本	明 治 三 十 八 年 末		大 正 元 年 末	
	社 數	拂込資本額	社 數	拂込資本額
五萬圓未滿	6,451	千圓單位 4,311,411	10,781	千圓單位 1,078,100
十萬圓未滿	9,857	5,614,471	1,277	1,277,000
五十萬圓未滿	1,352	1,620,000	1,352	17,111,000
百萬圓未滿	1,551	9,477,000	2,636	18,477,000
五百萬圓未滿	112	101,000,000	3,373	43,353,000

五百萬圓以上	三	三三、四三、七	五三	六三、四、四六
合計	八、九、四	九、七、八、八、六	一三、八、七、九	一、七、五、六、六、〇

今更ニ此兩年度ニ於ケル各等級會社ノ社數ノ總社數ニ對スル百分比例并ニ各等級會社ノ拂込資本額ノ同總額ニ對スル百分比例テ示ストキハ左ノ如シ(第三十三統計年鑑ニ據ル)

資 本	明治三十八年末		大正元年 末	
	社 數 %	拂込資本額%	社 數 %	拂込資本額%
五萬圓未滿	三、四、四	七、五	三、七、七	六、一、四
十萬圓未滿	一〇、五	六、〇	九、三、五	四、〇、二
五十萬圓未滿	一一、六	一、九、六	二、八、二	一、七、四、四
百萬圓未滿	一、五	一〇、一、三	一、〇、六	一、〇、一、五
五百萬圓未滿	一、三	一〇、二、〇	一、六、四	三、四、八
五百萬圓以上	〇、三	三、三	〇、三、三	三、七、八
計	一三、〇、〇	一〇〇、〇〇	一三、〇、〇	一〇〇、〇〇

此表ニ據レハ五十萬圓未滿ノ三等級ニ屬スル小會社ハ共ニ其拂込資本額ノ同總額ニ對スル百分率ニ於テ減少シタレトモ五十萬圓以上ノ三等級ニ屬スル大會社

ハ同上百分率ニ於テ増加シタルヲ見ル可シ

今更ニ此等ノ會社ヲ産業種別トシ即チ(1)農業(2)工業(3)商業(4)水陸運輸業トニ分
 テテ前記兩年末及ヒ其中間ノ四十一年末ニ於ケル社數、拂込資本金、積立金ヲ計算
 シ及ヒ拂込資本金ト積立金トノ和ノ一社平均高ヲ求ムルトキハ左表ノ如シ

社會業農				社會業工			
社數	拂込資本金(千圓單位)	積立金(同上)	前二項合計(同上)	社數	拂込資本金(千圓單位)	積立金(同上)	前二項合計(同上)
明治三十八年末	1,362	1,002	2,364	1,452	1,814	1,372	3,186
明治四十一年末	1,302	1,002	2,304	1,452	1,814	1,372	3,186
大正元年末	1,452	1,002	2,454	1,452	1,814	1,372	3,186
明治三十八年末 大正元年末ニ至 ル百分率	二倍〇六分増	二倍〇六分増	二倍〇六分増	八割増	八割増	八割増	八割増

社會業商		水陸運輸業		社會業商	
社	積	社	積	社	積
達	立	達	立	達	立
資	金	資	金	資	金
本	同	本	同	本	同
金	上	金	上	金	上
(千圓單位)		(千圓單位)		(千圓單位)	
五、三〇〇	五、三〇〇	六、六六六	六、六六六	六、八五五	六、八五五
六、五五五	六、五五五	七、六六六	七、六六六	八、〇〇〇	八、〇〇〇
八、〇〇〇	八、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	四、〇二二	四、〇二二
四、〇二二	四、〇二二	四、〇二二	四、〇二二	三、〇七二	三、〇七二
三、〇七二	三、〇七二	三、〇七二	三、〇七二	二、〇七二	二、〇七二
二、〇七二	二、〇七二	二、〇七二	二、〇七二	一、〇七二	一、〇七二
一、〇七二	一、〇七二	一、〇七二	一、〇七二	〇、〇七二	〇、〇七二
〇、〇七二	〇、〇七二	〇、〇七二	〇、〇七二	減少	減少
減少	減少	減少	減少	(鐵道國有二由ル)	(鐵道國有二由ル)
五、〇〇〇	五、〇〇〇	六、〇〇〇	六、〇〇〇	七、〇〇〇	七、〇〇〇
六、〇〇〇	六、〇〇〇	七、〇〇〇	七、〇〇〇	八、〇〇〇	八、〇〇〇
七、〇〇〇	七、〇〇〇	八、〇〇〇	八、〇〇〇	九、〇〇〇	九、〇〇〇
八、〇〇〇	八、〇〇〇	九、〇〇〇	九、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇
九、〇〇〇	九、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一一、〇〇〇	一一、〇〇〇
一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一一、〇〇〇	一一、〇〇〇	一二、〇〇〇	一二、〇〇〇
一二、〇〇〇	一二、〇〇〇	一三、〇〇〇	一三、〇〇〇	一四、〇〇〇	一四、〇〇〇
一三、〇〇〇	一三、〇〇〇	一四、〇〇〇	一四、〇〇〇	一五、〇〇〇	一五、〇〇〇
一四、〇〇〇	一四、〇〇〇	一五、〇〇〇	一五、〇〇〇	一六、〇〇〇	一六、〇〇〇
一五、〇〇〇	一五、〇〇〇	一六、〇〇〇	一六、〇〇〇	一七、〇〇〇	一七、〇〇〇
一六、〇〇〇	一六、〇〇〇	一七、〇〇〇	一七、〇〇〇	一八、〇〇〇	一八、〇〇〇
一七、〇〇〇	一七、〇〇〇	一八、〇〇〇	一八、〇〇〇	一九、〇〇〇	一九、〇〇〇
一八、〇〇〇	一八、〇〇〇	一九、〇〇〇	一九、〇〇〇	二〇、〇〇〇	二〇、〇〇〇
一九、〇〇〇	一九、〇〇〇	二〇、〇〇〇	二〇、〇〇〇	二一、〇〇〇	二一、〇〇〇
二〇、〇〇〇	二〇、〇〇〇	二一、〇〇〇	二一、〇〇〇	二二、〇〇〇	二二、〇〇〇
二一、〇〇〇	二一、〇〇〇	二二、〇〇〇	二二、〇〇〇	二三、〇〇〇	二三、〇〇〇
二二、〇〇〇	二二、〇〇〇	二三、〇〇〇	二三、〇〇〇	二四、〇〇〇	二四、〇〇〇
二三、〇〇〇	二三、〇〇〇	二四、〇〇〇	二四、〇〇〇	二五、〇〇〇	二五、〇〇〇
二四、〇〇〇	二四、〇〇〇	二五、〇〇〇	二五、〇〇〇	二六、〇〇〇	二六、〇〇〇
二五、〇〇〇	二五、〇〇〇	二六、〇〇〇	二六、〇〇〇	二七、〇〇〇	二七、〇〇〇
二六、〇〇〇	二六、〇〇〇	二七、〇〇〇	二七、〇〇〇	二八、〇〇〇	二八、〇〇〇
二七、〇〇〇	二七、〇〇〇	二八、〇〇〇	二八、〇〇〇	二九、〇〇〇	二九、〇〇〇
二八、〇〇〇	二八、〇〇〇	二九、〇〇〇	二九、〇〇〇	三〇、〇〇〇	三〇、〇〇〇
二九、〇〇〇	二九、〇〇〇	三〇、〇〇〇	三〇、〇〇〇	三一、〇〇〇	三一、〇〇〇
三〇、〇〇〇	三〇、〇〇〇	三一、〇〇〇	三一、〇〇〇	三二、〇〇〇	三二、〇〇〇
三一、〇〇〇	三一、〇〇〇	三二、〇〇〇	三二、〇〇〇	三三、〇〇〇	三三、〇〇〇
三二、〇〇〇	三二、〇〇〇	三三、〇〇〇	三三、〇〇〇	三四、〇〇〇	三四、〇〇〇
三三、〇〇〇	三三、〇〇〇	三四、〇〇〇	三四、〇〇〇	三五、〇〇〇	三五、〇〇〇
三四、〇〇〇	三四、〇〇〇	三五、〇〇〇	三五、〇〇〇	三六、〇〇〇	三六、〇〇〇
三五、〇〇〇	三五、〇〇〇	三六、〇〇〇	三六、〇〇〇	三七、〇〇〇	三七、〇〇〇
三六、〇〇〇	三六、〇〇〇	三七、〇〇〇	三七、〇〇〇	三八、〇〇〇	三八、〇〇〇
三七、〇〇〇	三七、〇〇〇	三八、〇〇〇	三八、〇〇〇	三九、〇〇〇	三九、〇〇〇
三八、〇〇〇	三八、〇〇〇	三九、〇〇〇	三九、〇〇〇	四〇、〇〇〇	四〇、〇〇〇
三九、〇〇〇	三九、〇〇〇	四〇、〇〇〇	四〇、〇〇〇	四一、〇〇〇	四一、〇〇〇
四〇、〇〇〇	四〇、〇〇〇	四一、〇〇〇	四一、〇〇〇	四二、〇〇〇	四二、〇〇〇
四一、〇〇〇	四一、〇〇〇	四二、〇〇〇	四二、〇〇〇	四三、〇〇〇	四三、〇〇〇
四二、〇〇〇	四二、〇〇〇	四三、〇〇〇	四三、〇〇〇	四四、〇〇〇	四四、〇〇〇
四三、〇〇〇	四三、〇〇〇	四四、〇〇〇	四四、〇〇〇	四五、〇〇〇	四五、〇〇〇
四四、〇〇〇	四四、〇〇〇	四五、〇〇〇	四五、〇〇〇	四六、〇〇〇	四六、〇〇〇
四五、〇〇〇	四五、〇〇〇	四六、〇〇〇	四六、〇〇〇	四七、〇〇〇	四七、〇〇〇
四六、〇〇〇	四六、〇〇〇	四七、〇〇〇	四七、〇〇〇	四八、〇〇〇	四八、〇〇〇
四七、〇〇〇	四七、〇〇〇	四八、〇〇〇	四八、〇〇〇	四九、〇〇〇	四九、〇〇〇
四八、〇〇〇	四八、〇〇〇	四九、〇〇〇	四九、〇〇〇	五〇、〇〇〇	五〇、〇〇〇
四九、〇〇〇	四九、〇〇〇	五〇、〇〇〇	五〇、〇〇〇	五〇、〇〇〇	五〇、〇〇〇

備考本表ハ第三十三統計年鑑二九二頁所載ニ據リテ湖製シタルモノナルカ會社々數カ前ニ引
用セルモノ即チ同年鑑二八八頁所載ノ計數ト符合セス而カモ同年鑑ニモ別段説明無キヲ
以テ止ムヲ得ヌ其儘引用セリ

此表ニ據ルニ資本金及積立金ノ一社平均ハ農業會社カ最モ長足ノ進歩ヲ爲シ工業會社之ニ亞キ商業會社又之ニ亞キ而シテ水陸運輸會社ニ於テハ却テ一社平均五十五萬圓ヨリ二十三萬圓ニ減少シタリ是レ他ナシ農業會社ハ最モ幼稚微弱ニシテ投資額ハ未タ甚タ大ナラサルカ故ニ其進歩ノ度合カ統計上ニ著ルシク現ハルルハ當然ナリ而シテ水陸運輸會社ノ資本金及積立金ノ一社平均カ二分一以上ノ減少ヲ見タル所以ハ政府カ明治三十九年三月法律第十七號ヲ以テ發布シタル鐵道國有法ニ由リ重ナル私設鐵道ヲ買收シタルカ爲ナリ

之ヲ要スルニ我國ノ會社の企業ニ於テ現時規模ノ増大資本ノ集中カ各種ノ産業ニ通シラ行ハレツツアルハ蓋シ争フ可カラサル事實ナリ然レトモ人或ハ余ニ反問シテ謂ハン曰ク會社企業ニ於ケル規模ノ増大資本ノ集中ハ必スシモ國民經濟上ニ於ケル富ノ集中即チ貧富ノ懸隔ヲ表示スルモノニ非スト余答ヘテ曰ク然リ然レトモ更ニ進ンデ各會社ノ内部ニ就テ觀察スルトキハ外面ニ表ハレタル規模ノ増大ハ同時ニ會社ノ資産ニ對シテ分前^チヲ有スル社員間ノ富ノ集中ヲ當然惹起スルヲ誰レカ否定シ得ンヤ會社ノ内ニ就テ合名會社ノ拂込資本及積立金ノ増加ハ個人資産ノ増加ト殆ント異ナルナキヲ以テ合名會社ニ於ケル資本ノ集中ハ即

チ個人間ニ於ケル富ノ集中ノ一事實ト認ムルヲ得ヘシ而シテ其他ノ會社特ニ株式會社ニ在リテハ合名會社ノ變態トモ謂フヘキ所得稅法ノ法定最少數若クハ之ニ近キ株主ヨリ成ルモノハ固ヨリ論ナク其他多數ノ株主ヨリ成ルモノニ於テモ謂ユル大株主ノ少數カ會社總株數ノ過半數ヲ握持スルニ由リテ其全權ヲ握ル者近年漸ク其多キヲ加ヘタリ而シテ此等ノ會社カ利益ヲ配當セントスルヤ往々其配當率ヲ過小ニシ積立金ヲ過大ニスルコトアリ何トナレハ配當額ヲ小ニスルトキハ納稅額ヲ小ニスルヲ得ヘク積立金ヲ大ニスルモ畢竟其大部分ハ彼等大株主ノ所有ニ外ナラサレバナリ又此等ノ會社カ事業ノ有利ナルヨリ之ヲ擴張スルニ當リ其資本ヲ倍加セントスルヤ其株式ハ往々之ヲ公募セスシテ全部又ハ大部分從來ノ株主ニ於テ負擔スルヲ常トセリ斯ノ如クニシテ大株主ハ益々其勢力ヲ加ヘ資本ノ集中ハ愈々其威ヲ逞フス

余ハ數多ノ會社ノ營業報告及株主名簿ヲ檢シテ上述ノ意見カ大ナル誤謬ナキヲ信スルモノナリ今參考ノ爲ニ余カ自カラ此等ノ營業報告及株主名簿ヨリ拔萃セル所ノ二三ヲ左ニ掲ケテ參照ニ便ニス

右第三期營業報告書ニ據レハ明治四十四年三月末日ニ於ケル同社株總數ハ二十萬株ニシテ株主數五千二百六十六人ナリシカ同第六期報告書ニ據レハ大正三年三月末日ニ於ケル同社株總數ハ舊ノ如ク二十萬株ナレトモ株主數ハ四千百十五人ニ減シタリ而シテ明治四十四年三月末日ニ於テハ同社ノ總資本一千萬圓ノ内拂込未済ノ分尙其四分三即チ七百五十萬圓ヲ餘シタレトモ大正三年三月末日ニ於テハ資本ハ總テ拂込済トナリ居レリ

北海道拓殖銀行

右第十一期營業報告書ニ據レハ明治三十八年六月末ニ於ケル同社株數六萬ニシテ株主數二千百六人ナリシカ同社第二十七期營業報告書ニ據レハ大正二年六月末ニ於ケル同社株數舊株六萬新株四萬合計十萬株ニシテ株主數ハ二千三十七人ナリサレハ八年間ニ於テ株數ハ六萬ヨリ十萬ニ増加シタレトモ株主數ハ却テ二千百六人ヨリ二千三十七人ニ減少シ而シテ持株平均數ハ二十八株ヨリ四十九株ニ増加セリ

日本郵船株式會社

明治三十八年四月末ニ於テハ株主人員三千八百六十九人株數四十四萬株額面金二千二百萬圓ナリシカ大正四年四月末ニ於テハ株主人員ハ四千九十九人ニ増加シ而シテ株數及ヒ額面金額ハ同前ナリ今此兩年度ニ於ケル株主等級別ヲ比較スレハ左ノ如シ

明治三十八年四月末		明治四十年四月末現在		大正四年四月末	
株主數	株數	株主數	株數	株主數	株數
二千株以上	三	一	一	二	一
一千株以上	一	一	一	一	一
千株以上	三〇	三	三	二	二
	三六		三六		三六

計	同	1,267,000	同	1,267,000
七百株以上	同	5,750	同	5,750
六百株以上	一八	11,900	一五	11,900
五百株以上	同	10,100	同	10,100
計	100	267,000	同	267,000
累計	一四	287,100	同	287,100

日本勸業銀行

同行第十八期乃至第三十三期營業報告ニ依ルニ明治三十九年六月ヨリ大正三年十二月ニ至ル各期ニ於ケル同行株數及ヒ株主數ノ變動ハ左表ノ如シ

年	期	株數	株主數	資本金	同上未拂込
明治三十九年六月	十二月	五萬株	10,101	10,000,000円	100,000,000円
四十年六月	十二月	同上	10,101	同上	同上
四十一年十二月	十二月	同上	10,101	同上	同上
四十二年六月	十二月	同上	10,101	同上	同上
四十四年六月	十二月	拾萬株	10,101	20,000,000	200,000,000

大阪商船株式會社

年次	株數	株主數	五百株以上株主數	同上株數
大正十五年六月	同	同	同	同
大正十四年六月	同	同	同	同
大正十二年六月	同	同	同	同
大正十一年末	六十六萬株	五、七二八人	三、八一八人	三、八一八株
同 四十一年末	同	六、三五八人	三、二八八人	三、二八八株
同 四十二年末	同	六、五九八人	三、三三三	三、三三三株
同 四十三年末	同	六、三三七	三、三三三	三、三三三株
同 四十四年末	同	六、五二六	三、三三三	三、三三三株
大正元年末	參拾萬株	六、三三四	一、〇〇〇	一、〇〇〇株
同 二年末	同	六、一五八	一、〇〇〇	一、〇〇〇株
同 三年末	同	六、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇株

新社株主名簿ニ據レハ大正二年六月末ニ於テ株主人員六千一百二十二名株數三十三萬株ナリシニ
 大正三年十二月末ニ於テハ株主人員ハ六千六百二十二人ニ増加シ株數ハ舊株三十三萬株新株十六萬
 五千株合計四十九萬五千株トナレリ而シテ同社拂込資本金ハ大正二年六月末ニ於テハ千六百萬圓
 ナリシカ大正三年十二月末ニハ二千五百五十七百二千五百圓トナリシカ故ニ株主一人ノ平均拂込資
 本ハ約二千六百圓ヨリ三千二百圓ニ増加シタルコトトナルナリ

株式會社第一銀行

同行第十八期乃至第三十七期營業報告ニ依ルニ同行明治三十八年六月末ヨリ大正三年十二月末ニ至ル株數及株主數ノ變動ハ左表ノ如シ

年 期	株 數	株主數	資本金	同上未拂込	積立金
明治三十八年 六月 十二月	二十萬株	一八、〇〇〇	一〇,〇〇〇,〇〇〇 円	三,〇〇〇,〇〇〇 円	一,〇〇〇,〇〇〇 円
三十九年 六月 十二月	同上	一八、〇〇〇	同上	同上	一,〇〇〇,〇〇〇
四十年 六月 十二月	同上	一八、〇〇〇	同上	同上	一,〇〇〇,〇〇〇
四十一年 六月 十二月	同上	一八、〇〇〇	同上	同上	一,〇〇〇,〇〇〇
四十二年 六月 十二月	同上	一八、〇〇〇	同上	同上	一,〇〇〇,〇〇〇
四十三年 六月 十二月	同上	一八、〇〇〇	同上	同上	一,〇〇〇,〇〇〇
四十四年 六月 十二月	同上	一八、〇〇〇	同上	同上	一,〇〇〇,〇〇〇
四十五年 六月 十二月	同上	一八、〇〇〇	同上	同上	一,〇〇〇,〇〇〇

第六節 現時我國ニ於ケル土地ノ兼併

余ハ前節ニ於テ現時我國ニ於ケル富ノ一般的集中ヲ論シ特ニ各種産業ノ會社ニ於ケル規模ノ増大資本ノ合同カ個人間ニ於ケル富ノ集中ヲ當然惹起スヘキヲ論シタリ今ヤ單ニ農業ニ就テ之ヲ見ルニ其規模ハ必スシモ大ナルヲ加ヘスシテ而モ土地ノ兼併カ漸次行ハレツツアリ而シテ土地ノ兼併ハ取リモ直サス農業社界ニ於ケル富ノ集中ヲ意味スルナリ然リ而シテ農民ハ尙全國民ノ半數以上ヲ占ムルモノナルヲ知ルトキハ土地兼併ノ國民經濟上ニ及ホスヘキ影響ノ甚大ナルヲ思ハスンハアラス況ンヤ市街地ニ於テモ亦土地兼併カ一層急劇ニ行ハレツツアルヘキニ於テオヤ但余ハ都會ノ土地ニ關シテハ未タ詳細ナル統計資料ヲ有セサルヲ以テ之カ評論ヲ他日ニ讓リ茲ニ少シク農業地ニ就テ考察スル所アラムト欲ス

第一、農業地ノ兼併ヲ論スルニ先タチ農民カ國民ノ如何ナル部分ヲ占ムルヤヲ知ラサルヘカラス此點ニ關シ農商務省農務局カ農會調査ニ基ツキ編成シタル農事統計(大正四年五月刊行)ニ左ノ表アリ

全國國民總戶數及農家(耕作ニ從事セサル地主ヲ除ク)戶數

年次	總戸數	農家戸數			總戸數ニ對スル百分比	
		專業農家	兼業農家	合計		
明治三七	千戸單位 八、四二〇	千戸單位 三、七七一	千戸單位 一、六三九	千戸單位 五、四一〇	四四・八%	一九・四%
三八	八、四八六	三、七五七	一、五八〇	五、三三七	四三・三%	一九・〇%
三九	八、六八九	三、八一九	一、五八九	五、四八〇	四三・九%	一九・九%
四〇	八、七〇〇	三、七七八	一、六二七	五、四〇五	四三・五%	一九・八%
四一	八、九六五	三、七〇七	一、六〇〇	五、三〇七	四三・一%	一九・五%
四二	九、〇〇〇	三、七〇七	一、六〇七	五、三一四	四三・一%	一九・七%
四三	九、〇〇〇	三、六九七	一、六一一	五、三〇八	四三・〇%	一九・〇%
四四	九、三三三	三、六八五	一、五七三	五、二五八	四三・〇%	一九・七%
大正一	九、四三三	三、六八四	一、五七三	五、二五七	四二・九%	一九・六%
大正二	九、五〇〇	三、七〇〇	一、五七三	五、二七三	四二・九%	一九・八%

此表ニ據レハ全國民ノ總戸數ハ明治三十七年ヨリ大正二年ニ至ル十年間ニ於テ百八萬七千戸ヲ増加(即チ一割八分ヲ増加)シタルニ農業戸數ハ專業ニ於テ六萬九千ヲ減シ兼業ニ於テ九萬七千ヲ増シ結局兼業專業合計ニ於テ僅カニ二萬七八千ヲ増加(即チ五厘ヲ増加)シタルニ過キササルナリ故ニ總戸數ニ對シテ百分比例ヨリ見ルトキハ專業農家ハ四十四・八九ヨリ三十九・〇ニ減少シ兼業農家ト雖亦十九・

四九ヨリ十八・二八ニ減少シタリ嗚呼此減少ハ果シテ何物ヲ意味スルカ樂天主義者ハ則チ謂ハン是レ一ニハ農業經營方法ノ進歩カ資本ヲ要スルコト比較的ニ多クナリ勞働ヲ要スルコト比較的少クナリタルニ由リ二ニハ商工業ノ發達都會ノ繁榮カ人民ヲシテ漸ク農村ヲ去リテ都會ニ就カンムルカ爲ナリト此說必スシモ誤マレリトナサスト雖是レ恐ラクハ獨リ照明ノ方面ヲ見テ陰暗ノ側面ヲ忘ルルモノニ非サル乎記憶セヨ國民經濟上主要ノ問題ハ畜ニ財ノ生産ノミニ關セスシテ財ノ分配ニ關スルモノナルコトヲ彼ノ農村ヲ去テ都會ニ就ク所ノ多數ノ手ハ素ヨリ富ヲ作ルコトニ助力スヘシト雖現時ノ資本主義ノ下ニ在リテハ彼等ノ與カリテ作レル富ハ平等ニ彼等ノ手ニ歸スルモノニ非スシテ其大部分ハ少數者ニ集中セラルルモノナルコトヲ思考セヨ但シ余ハ必スシモ此集中ヲ以テ直チニ不正不當ナリトスルモノニ非スタタ現時產業組織ノ趨勢カ必至的ニ富ノ集中ヲ來スノ事實ヲ認ムルノミ

第二、農業地ノ兼併ハ如何ニ行ハルルヤヲ見ルニ第一ニ述ヘタル如ク農村ヲ去テ都會ニ就ク者ハ多クハ其從來耕作セシ土地ヲ失ヒタルカ又ハ小作人ニシテ農業ヲ廢シタルモノナルヘシ而シテ農村ニ在ル者ニ就テ之ヲ見ルニ全國ニ於ケル自

作農ハ漸次減少シテ小作農ハ稍増加セリ是レ明カニ農地ノ兼併ヲ語ルモノニ非サル乎請フ左表ヲ見ヨ

自作小作自作兼小作各農家戸數 (大正四年五月農商務省刊行ノ農事統計ニ據ル)

年次	自作農家	小作農家	自作兼小作農家	計	百分比		
					自作農家	小作農家	自作兼小作農家
明治 四一	17,972	14,911	2,127	35,010	51.3%	42.6%	5.9%
明治 四二	17,322	14,826	2,111	34,259	50.6%	42.7%	5.7%
明治 四三	17,726	14,800	2,136	34,662	51.2%	42.7%	5.9%
明治 四四	17,726	14,800	2,136	34,662	51.2%	42.7%	5.9%
大正 一一	17,726	14,800	2,136	34,662	51.2%	42.7%	5.9%

耕地所有ノ廣狹ニ依リ區別シタル地主戸數

年次	五反未満	五反以上	一町以上	三町以上	五町以上	十町以上	五十町以上	合計
明治 四一	2,276,275	2,276,275	2,276,275	2,276,275	2,276,275	2,276,275	2,276,275	14,865,675
明治 四二	2,276,275	2,276,275	2,276,275	2,276,275	2,276,275	2,276,275	2,276,275	14,865,675

年次	百分例					
	五反未滿	五反以上	一町以上	三町以上	五町以上	十町以上
明治 四三	二、四〇、一一三	一、三六、八六三	八、〇、八六六	二、七、〇〇九	一、七、七七三	四、一、三三三
四四	三、三三、九三六	一、五八、六四九	八、八、七三三	三、六、七七一	一、六、九二二	四、一、五〇〇
大正 一	二、四〇、九四四	一、四四、五三九	八、七、九二〇	二、六、七二六	一、七、七九九	四、一、四九六
二	二、五五、三三三	一、五二、一一七	八、八、七九九	二、六、三五六	一、三、七七六	四、〇、九六六
						二、九九九
						四、九〇〇、六五七

年次	百分例					
	五反未滿	五反以上	一町以上	三町以上	五町以上	十町以上
明治 四一	四、六、一三三	二、〇、九二〇	一、八、一六六	五、八、五三三	二、九、九二九	〇、八、一一一
四二	四、六、七三三	二、一、一五五	一、八、〇八八	五、八、五三八	二、五、五六六	〇、八、一一一
四三	四、七、四三三	二、三、六八八	一、七、八六六	五、五、四四四	二、五、九九九	〇、八、四四四
四四	四、七、七三三	二、三、八六六	一、八、〇〇〇	五、四、五五五	二、五、九九九	〇、八、五五五
大正 一	四、七、七三三	二、三、八六六	一、七、七三三	五、八、四四四	二、五、九九九	〇、八、四四四
二	四、八、〇〇〇	二、三、八六六	一、八、〇〇〇	五、八、四四四	二、五、九九九	〇、八、四四四
						〇、八、四四四
						〇、八、四四四

以上ノ三表ヲ見ルトキハ近年農村ニ於ケル土地ノ兼併カ漸々行ハレツツアルヲ推測スルニ難カラス。而シテ前掲第三表ノ百分比例ヲ見ルニ五反未滿ナル最小耕地ノ所有者ト五町以上ノ大耕地ノ所有者トハ其割合ヲ増加シ五反以上、一町以上、及三町以上(五町未滿)ノ耕地所有者ハ減少シタリ是レ我國ニ於ケル中農階級ノ漸次衰

頗傾覆スルヲ示スモノニシテ苟モ經世ノ學術ニ志ス者ノ深ク注意シテ之カ保全救濟ノ道ヲ講セサル可カラサル所ノモノナリトス

猶現時我國ニ於ケル富ノ分配ノ狀況ハ左ノ地租納額人員表ニ由リテ之ヲ徵スルヲ得ヘキナリ

我國地租納額人員表 (天正三年一月一日現在)

千圓以上	二百圓以上	五十圓以上	十圓以上	五圓以上	一圓以上	一圓未満
1,123人	3,486人	15,379人	1,861,486人	1,136,101人	3,100,348人	5,734,210人

此表ニ依レハ地租納者九百五十七萬三千六百五十八人ノ内千圓以上ノ納者ハ僅カニ其八千六百分ノ一ニ過キス而シテ一圓未満ノ納者ハ實ニ其四割ヲ占ム、今假リニ五十圓以上ノ納者ヨリ千圓以上ノ納者ニ至ルマテヲ富者トシ五十圓未満五圓以上ノ納者ヲ中産者トシ五圓未満ノ納者ヲ小産者トシテ積算スルトキハ即チ左表ノ如シ

五十圓以上	五圓以上	五圓未満
3,486人	1,861,486人	6,734,210人
全數ニ對スル割合 二歩五厘	全數ニ對スル割合 一割七歩	全數ニ對スル割合 七割〇五厘

第七節 結 論

富ノ不平等ノ現状ハ前述ノ如シ而シテ之カ原因ヲ討究スルニ蓋シ大要左ノ如シ
第一、各個人ノ稟性同シカラサルコト 古語ニ性ハ相近ク習ハ遠シトイヒテ天
稟ノ差ハタトヘ僅カナルモ教育習慣等ノ勢力ニ由リテ各個人ニ賢不肖ノ大差ヲ
生スルハ論ヲ俟タスト確實ハ各個人ハ其天賦ノ才能ニ於テ既ニ大ナル差等アル
モノナリ故ニ孔子ハ上智ト下愚トハ移ラスト曰ヘリ然ルニ歐洲第十八世紀ニ於
テ人ノ天稟ノ智力及徳性ハ同等ナリトノ學說一般ニ行ハレる一そ一ハ適當ナル
教育ニ由リテ人ノ才能ヲ其欲スルママニ養成シ得ヘシト論シるば一ど、お一うえ
んハ良好ナル條件サヘ具備スルトキハ各個人ハ同等ニ勤勉トナリ又同等ニ徳義的
トナルモノナリトノ確信ヲ以テ彼ノ樂天的社會改良ノ實驗ヲ行ヒタリキ然ルニ
第十九世紀ニ至リテだ一ういんカ首唱シタル生物學上ノ研究ノ結果ハ同種ノ個
體ノ間ニ天稟ノ不同アルコトヲ確認シ而シテ此不同ハ遺傳的ニ繼承スルモノナ
ルコトヲ證明シタリ而シテ其後學者ノ研究ハ社會上ノ事實ニ就テモ亦同様ノ理
法行ハルルヲ認メタリサレハ社會ノ各個人間ニ富ノ獲得力ニ差等アルハ天稟ノ
差カ其一原因而カモ其主要原因タルハ亦疑ヲ容レサルナリ

第二 境遇ノ不同 タトヘ同一ノ天稟ヲ賦セラレタル人々ト雖良好ナル境遇ニ立ツ者ハ其才能ヲ發揮スルコト一層容易ナリ天賦ノ才能同一ナレハ富者ノ子ハ貧者ノ子ヨリハ富ヲ作ルコト著ルシク容易ニシテ而シテ小ナル富ヨリハ大ナル富カ其増殖力更ニ大ナルヲ以テ富ハ益々富ムコトトナルナリ

以上ハ富ノ不平等ノ自然的原因ト稱スヘキモノナリト雖此外ニ人爲的原因ト稱スヘキモノノ重ナルモノヲ擧クレハ左ノ如シ

第三 私有財産制度及ヒ財産相續ノ制度 私爲財産制度カ富ノ集中ヲ容易ナラシムルハ論ヲ俟タステニ土地ノ所有ヲ認ムル法制ハ謂ユル Unearned increment ヲ個人ノ所得ニ歸セシムルモノニシテ輒近文明諸國ニ於ケル貧富懸隔ノ大原因ヲ成スモノナリ

第四 大規模ノ産業ノ發達特ニ「トラスト」ノ組織ノ成功

第五 輒近諸國ノ慣用セル間接稅及保護關稅ノ政策カ概シテ富者大生産者ニ利益ニシテ貧者消費者ニ不利ナルコト

第六 戰爭ノ負擔及外交上ノ利權獲得ハ亦前項ト同様ノ結果ヲ生スルコト

余ハ以上ノ諸點ニ就テハ更ニ題ヲ政メテ之ヲ詳論セント欲スレトモ姑ク茲ニ筆ヲ擱ク

前回ノ正誤 第三號七三頁第六行 第三種所得稅ヲ統ムル者トアルハ第三種所得者ノ誤